

平成29年度(第61回)
岩手県教育研究発表会資料

体育/保健体育

「運動の楽しさや喜びを味わわせる指導の在り方」



平成30年2月9日
北上市教育委員会
北上市立黒沢尻西小学校
高橋清貴

I 研究の全体構想

研究主題	運動の楽しさや喜びを味わわせる指導の在り方
------	-----------------------

めざす子ども像
○運動に親しみ力いっぱい運動に取り組む子ども ○めあての達成に向け運動に取り組む子ども ○友達と関わりあいながら運動に取り組む子ども

研究仮説：体育科の授業において、以下の観点を重点化して指導していけば、運動の楽しさやうれしさを味わわせることができるであろう。	
仮説1	仮説2
1 6年間の系統性を踏まえた指導	2 運動技能の高まりや達成感が得られるような指導
(1) 系統性を重視した単元計画の作成	(1) 意欲を高めるための課題設定と振り返りの場の設定 (2) 技能を高めたり達成感が得られたりするような単元指導計画・1単位時間の指導の工夫

II 研究主題設定の理由

<p>学習指導要領解説体育科の目標に、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」と記されている。「運動に親しむ資質や能力」とは、運動への関心や自ら運動する意欲、仲間と仲良く運動をすること、各種の運動の楽しさや喜びを味わえるよう自ら考えたり工夫したりする力、運動技能などを指す。これらの資質や能力を育てるためには、児童の能力・適性、興味・関心等に応じて、運動の楽しさや喜びを味わい、自ら考えたり工夫したりしながら運動の課題を解決するなどの学習が重要であると解説されている。</p> <p>運動をする児童としない児童の二極化が言われ、「スポーツが嫌い」な児童がいる中、スポーツに触れる機会を増やし、スポーツに興味をもたせていくことは大切であると考える。また、障がいをもつ児童が、一緒に取り組める種目が存在する体育の研究に取り組んでいくことは、これからの教育課題に対する一つの答えを出していくことになると考える。</p>	<p>本校の教育目標は、「仲間とともに伸びようとする子どもの育成」であり、その具体を「理想をかかげ自ら向上に努める子ども（より高く）」「人間と自然を愛し情操豊かで品性のある子ども（より美しく）」「心身ともに健康でたくましい行動力のある子ども（よりたくましく）」と定めている。</p> <p>「よりたくましく」という目標は、健康に過ごすための生活習慣を形成し、一人ひとりが目標に向かって運動に取り組む児童の育成をねらいとしている。運動が好きで楽しいと感じることは、生涯にわたり運動に親しむ資質を育てることにつながり、小学校でその基礎を確実に育成しなければならない。また、進んで運動を行うことで、体力の向上や心身の健康な児童育成につながると考える。心身ともに健康であることは、「より高く」、「より美しく」の目標を達成させることにもつながり、本研究を推進していくことは、学校教育目標の具現化につながると考える。</p>	<p>H27年度～H28年度は体育部会研として研究に取り組んできたが、以下のような実態があった。</p> <p>(1) H28年度に行った新体力テストの結果を見ると全体的に全国平均と比べて大きく落ち込んでおり、特に「握力・ボール投げ・50M走」は、男女とも下回っている学年が多い。また、男子においては、どの学年も全国平均を下回っている項目が多く体力の低下が深刻である。</p> <p>(2) 肥満児童の割合はH28年度よりは減って8.9%となったが、全国平均と比較するとまだ高い。</p> <p>(3) 日頃積極的に運動している児童がいる一方で、あまり運動しない児童もいるなど二極化が見られる。(H28 新体力テストより)</p> <p>(4) 体育の授業は楽しいと感じている児童が多いが、あまり楽しくないと感じている児童が女子に多く、全国・岩手県平均を上回っている。(H28全国体力・運動能力、運動習慣等調査より)</p> <p>上記の課題を改善するために体力向上の根幹である体育科の授業改善に努めていきたいと考える。</p>
---	--	--

III 研究の基本的な考え方

1 めざす子ども像について

体育科において目指す子ども像を次のように捉える。

- 運動に親しみ力いっぱい運動に取り組む子ども
- めあての達成に向け運動に取り組む子ども
- 友達と関わりあいながら運動に取り組む子ども

(1) 運動に親しみ力いっぱい取り組む とは

- ア 苦手な種目にも頑張ろうという気持ちをもって取り組むこと
- イ 1単位時間の授業で汗をかくくらい運動すること

(2) めあての達成に向け運動に取り組む とは

- ア 体育の授業での自分の課題解決や数値目標に向けて運動すること

(3) 友達と関わり合いながら とは

- ア 友達の良さ・頑張りを認めたりアドバイスをしたりすること
- イ 友達の良い動きから学んだことを自分の動きに取り入れようとする事
- ウ できた喜び、作戦がうまくいった喜びを友達と一緒に共有できること
- エ うまくできない友達を励ましたり、作戦がうまくいかなかったときにチームで励まし合ったりできること

2 研究主題についての基本的な考え方

運動の楽しさや喜びを味わわせる指導の在り方



- ・自ら体を動かそうとし、たくさん運動したときの楽しさや喜び（運動に親しみ力いっぱい）
- ・友達と教え合ったり励まし合ったりできる楽しさや喜び（友達との関わり合い）
- ・運動ができた、技能が上達したと達成感を感じる楽しさや喜び（めあての達成に向け）
- ・課題の解決に向けて運動したり考えたりする中で、新たに感じたり分かっていたりしたときの楽しさや喜び（めあての達成に向け）

IV 研究内容と実際

1 6年間の系統性を踏まえた指導

(1) 系統性を重視した単元計画の作成

体育の授業で行われがちなことの一つに、体育の得意な先生が担任のときは難しい技に挑戦させたり、あまり得意でない先生が担任のときには容易な技を中心に練習させたりと担任の先生によって指導内容が変わることがある。そのため、学年が上がるにつれて技の難易度が上がる種目においても、下学年の方が難易度が高い指導が行われることがある。また、指導内容を確認しておかないために、取り組まなければいけない領域に取り組まなかったり、一つの領域に時間をかけすぎたりすることもある。本校においても実際にそのようなことがあった。

そこで、年間計画をきちんと作成し、学習内容を明示することで、どの先生がどの学年の担任になっても取り組まなければいけない領域は必ず取り組むようになる。また、技の系統性をきちんと明示し、どの学年でどこまで取り組めばよいかを明らかにすることで、担任による指導の技の難易度に差が出ることはなくなると考えた。

さらに、学年に応じた種目や実態に応じた技の指導を行うことで、どの児童も「できた」、「できそうだ」という運動の喜びを得ることができる。また、系統性を踏むことで下学年から繰り返し練習を行い、技の習得につなげることができると考えた。

年間計画を作成する際は指導要領に沿いながら本校の実態を基にして作成することが大切だと考えた。ここ数年の本校の新体力テストの結果を見ると、「握力」、「50メートル走」、「ボール投げ」が特に全国平均と比べると落ち込みが見られた。また、「平成28年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の児童質問調査から、「放課後や休日に投げる運動をすること」において、「あまりない、まったくない」と回答した児童の割合が、男子 51.3 %、女子 42.0 %と全国と比べると高い数値を示していた。このことから「投げる」という運動においては、特に意識して、系統表を作成した。

以下【表1】は、「E ゲーム ボール運動」における系統表である。

◎実践例（作成した系統表表）

【表1】E ゲーム、ボール運動

低 学 年	中 学 年	高 学 年
ア ボールゲーム 1年：ころがしドッチボール、的当てゲーム 2年：シュートボール①（攻守交代型）シュートボール②（攻守入り交じり） 投げる、つく、とる、転がす、当てる（蹴るは体づくりで）	ア ゴール型ゲーム 3年：サッカー、シュートボール（パス、ドリブルあり） 4年：サークルシュート ボールをもったときにゴールに体を向ける。味方にボールを手渡したり、パスを出したりする。ボール保持者と自分の間に守備者がいないように移動する。	ア ゴール型ゲーム 5年：ハンドボール 6年：バスケットボール 近くにいるフリーの味方にパスを出す。相手にとられない位置でドリブル。ボール保持者と自分との間に守備者を入れないように立つ。得点しやすい場所に移動し、パスを受けてシュートする。ボール保持者とゴールの間に体を入れて相手の得点を防ぐ。
	イ ネット型ゲーム 3年：フロアーボール 4年：ブレルボール ボールの方向に体を向けたり、ボールの落下点やボールを操作しやすい位置に体を移動したりする。いろいろな高さのボールを片手または両手ではじく、打ちつけるなどして相手コートに返球する。	イ ネット型ゲーム 5年：ブレルボール（トス→アタック） 6年：ソフトバレーボール 自陣のコートから相手コートに向けサーブスを打ち入れる。味方が受けやすいようにボールをつなぐ。相手コートにボールを打ち返す。
	ウ ベースボール型ゲーム 4年：キックベース ボールをフェアグラウンド内に蹴る。投げる手と反対足を一步前に踏みだしてボールを投げる。向かってくるボールの正面に移動する。ベースに向かって走り、駆け抜ける。	ウ ベースボール型 5年：ティーボール① 止まったボールや易しく投げたボールをバットでフェアグラウンドに打つ。打球方向に移動し捕球する。塁間を打球の状況に応じて走塁する。 6年：ティーボール② 5年生+捕球する相手に向かって、オーバーハンドで投げる動作。
イ 鬼遊び 1,2年：鬼遊び（増え鬼、氷鬼、色鬼、手つなぎ鬼、ボール当て鬼、漁師と魚、しっぽとり、宝取り鬼等） 相手（鬼）から逃げたり身をかわしたりする。相手（鬼）のいない場所に移動したり駆け込んだりする。逃げる相手をタッチしたり、マークを取ったりする。		

*他の領域は【別紙資料1】に掲載。学年別の年間指導計画は【別紙資料2】

○考察

系統性を考えた年間指導計画を作成したことで、実施種目や学習時間を共通理解できた。さらに他学年とのつながりを理解し、教師が指導を行うようになった。

2 運動技能の高まりや達成感が得られるような指導

「運動の楽しさや喜び」を味わわせるために、体育科において、運動技能の高まりや達成感が感じられるように指導することは特に大切だと考える。そこで以下の点を意識して指導すればよいと考えた。

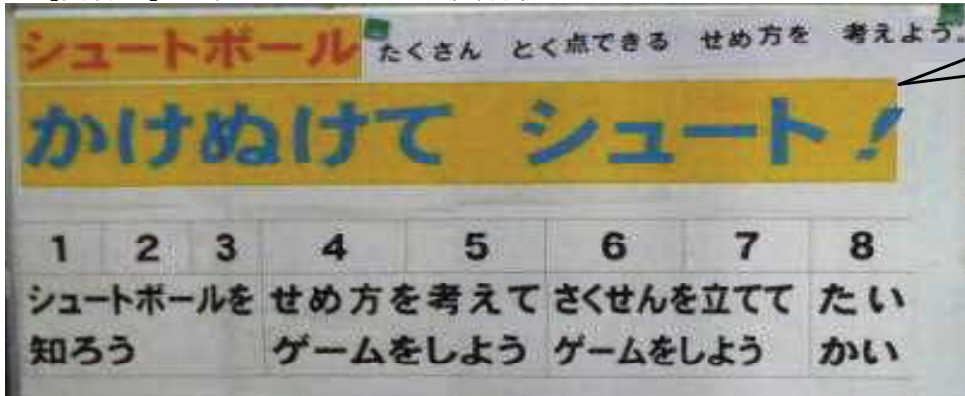
(1) 意欲を高めるための課題設定と振り返りの場の設定

運動技能の高まりや達成感を得るためには、授業者が目指す児童のゴール像をきちんと描き、意欲的に取り組めるような課題を設定していく必要がある。また、授業の振り返りを行うことで児童自身が自分の技能の高まりに気付くとともに、児童がどのように感じたのか教師も理解することができる。本校では技能の変化や達成感が分かるように、アンケートをとったり学習カードに自己評価や感想を書かせたりすることにした。

◎実践例

ア 課題の設定

【資料1】2年シュートボール 板書掲示物



単元名を毎回掲示し、学習課題を継続して意識させた。【資料1】。

単元の最初に学習計画を提示し、どのような学習をするか見通しをもたせた。【資料2】。

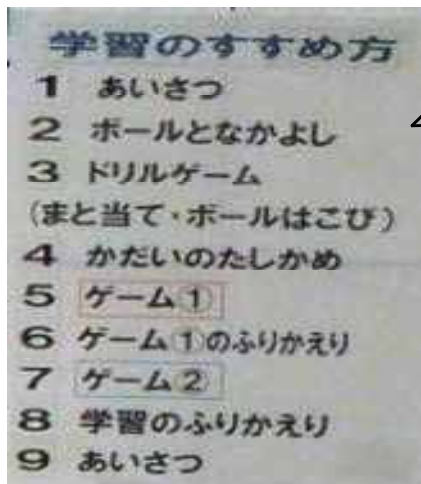
【資料2】6年バスケットボール 板書掲示物

学習計画

時間	1	2	3 (本時)	4	5	6・7	8・9
	オリエンテーション		パスをつないでシュートをしよう。	フリーになってシュートをしよう。	ゴールの近くでシュートをしよう。	全員得点目指し、チームに合った戦術を選ぼう。	学習したことを生かしてゲームを楽しもう。
5	整列・挨拶・学習の流れの確認・感覚づくり・場の準備						
10	ドリルゲームの 行い方	ドリルゲームの 行い方	ドリルゲーム「連続シュートゲーム」「パス＆パスゲーム」				バスケット ボール大会
15			学習課題の確認				
20	ゲームの 行い方	ゲームの 行い方	ゲーム① (3対2)	ゲーム① (3対3)	ゲーム① (3対3)		
25			ゲーム② (3対2)	ゲーム② (3対3)	ゲーム② (3対3)		
30	ゲームの 行い方	ゲームの 行い方	ゲーム② (3対2)	ゲーム② (3対3)	ゲーム② (3対3)		
35							
40	片付け・学習の振り返り						

イ 振り返り

【資料3】 2年シュートボール 板書掲示物



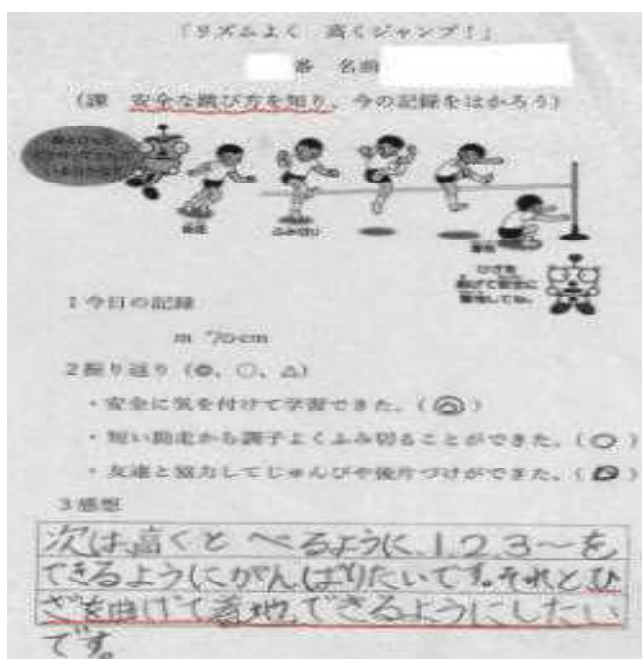
チームでの振り返りと個人での振り返りを設けた例
ゲーム①の後に1回チームで振り返り、ゲームの②の後に
もう1回個人で振り返る場を設けた。【資料3】。

【資料4】 5年ティーボール 振り返り場面



ゲーム①の後の振り返り
「素早くアウトがとれたかな？」
捕球後、アウトゾーンに自分で走り込
んだか、アウトゾーンにいる味方に投
げたか確かめている。(適切に判断で
きたかどうか) 【資料4】。

【資料5】 4年高跳び 学習プリント



授業の終末に課題に対しどうだったか振り返
りを行い、次回の課題につなげようとしている。
(課題に対する振り返りの意識) 【資料5】。

【資料6】5年ティーボール 診断的・総括的授業評価

【表2】5年ティーボール アンケート結果

練習態度についての調査

2年2組 ぼん 老師

この文章を読んで、自分の考えに「はい」か「いいえ」か「どちらでもない」かを記入してください。

1 練習では、みんなが、楽しく練習できます。
2 練習は、帰るまであきらめずに続けます。
3 練習をするとき、みんなが、よく練習します。
4 練習では、みんなが、練習の楽しさをみんなに伝えます。
5 練習で練習するときは、みんなが、練習の楽しさをみんなに伝えます。
6 練習で練習するときは、みんなが、練習の楽しさをみんなに伝えます。
7 練習で練習するときは、みんなが、練習の楽しさをみんなに伝えます。
8 練習で練習するときは、みんなが、練習の楽しさをみんなに伝えます。
9 練習で練習するときは、みんなが、練習の楽しさをみんなに伝えます。
10 練習で練習するときは、みんなが、練習の楽しさをみんなに伝えます。

11 練習で練習するときは、みんなが、練習の楽しさをみんなに伝えます。
12 練習で練習するときは、みんなが、練習の楽しさをみんなに伝えます。
13 練習で練習するときは、みんなが、練習の楽しさをみんなに伝えます。
14 練習で練習するときは、みんなが、練習の楽しさをみんなに伝えます。
15 練習で練習するときは、みんなが、練習の楽しさをみんなに伝えます。
16 練習で練習するときは、みんなが、練習の楽しさをみんなに伝えます。
17 練習で練習するときは、みんなが、練習の楽しさをみんなに伝えます。
18 練習で練習するときは、みんなが、練習の楽しさをみんなに伝えます。
19 練習で練習するときは、みんなが、練習の楽しさをみんなに伝えます。
20 練習で練習するときは、みんなが、練習の楽しさをみんなに伝えます。

項目	単元はじめ	単元終わり	項目	単元はじめ	単元終わり
楽しく勉強	2.94	3.00	工夫して勉強	2.78	2.81
明るい雰囲気	2.75	2.81	他人を参考	2.93	3.00
丈夫な体	2.97	3.00	あてを持つ	2.62	2.88
精一杯の運動	2.94	2.87	時間外練習	2.41	2.13
心理的充足	2.88	2.90	友人・先生の励まし	2.75	2.75
楽しさ(情意目標)	14.47	14.60	学び方(認識目標)	13.50	13.56

項目	単元はじめ	単元終わり	項目	単元はじめ	単元終わり
運動の有能感	1.97	2.03	自分勝手	2.66	2.81
できる自信	2.41	2.47	約束事	2.84	2.97
自発的運動	2.66	2.78	先生の話聞く	2.97	2.97
授業前の気持ち	2.78	2.75	ルールを守る	2.94	3.00
いろんな運動の上達	2.91	2.91	勝つための手段	2.97	2.94
技能(運動目標)	12.73	12.94	協力(社会的行動目標)	14.38	14.69

* 「はい」・・・3 「どちらでもない」・・・2 「いいえ」・・・1で集計

【資料7】2年シュートボール アンケート

【表3】2年シュートボール アンケート結果

体い(アンケート)

2年2組 ぼん 老師

1 体い(の) 学し(は)ば() 好き(です)か
 好き どちらかといえば好き どちらかといえば好きではない 好きではない
 [その理由]

2 ボールゲームは() 好き(です)か(ボールゲーム、ボム(ゲーム)など)
 好き どちらかといえば好き どちらかといえば好きではない 好きではない
 [その理由]

3 ボールゲームの() 学し(は)う()、気(を)つ(け)て() いる(こ)と(は) 何(で)す(か)。

4 体(を)う(ご)か(し)て() あそ(ぶ)こ(と)は() 好き(です)か。
 好き どちらかといえば好き どちらかといえば好きではない 好きではない
 好き(と)思(う)人(は)、ど(ん)な(よ)う(に)お(も)て(あ)が(ら)せ(ま)す(か) 好き(と)思(う)人(は)、な(に)で(す)か。

項目	単元はじめ(%)			
	好き	どちらかといえ ば好き	どちらかといえ ば嫌い	嫌い
体育の学習は好きですか	78.57	10.71	3.57	7.14
ボールゲームは好きですか	89.28	7.14	0	3.57
体を動かして遊ぶことは好きですか	89.28	7.14	0	3.57



項目	単元終わり(%)			
	好き	どちらかといえ ば好き	どちらかといえ ば嫌い	嫌い
体育の学習は好きですか	83.33	13.33	3.33	0
ボールゲームは好きですか	83.33	13.33	3.33	0
体を動かして遊ぶことは好きですか	86.66	10	0	3.33

○考察

ア 課題の設定

単元の最初に、授業のゴール像を示すことで「楽しそうだ」という意欲の向上につながった。

イ 振り返り

授業中、授業後の振り返りを行うことで、自分たちの課題を確認し、もっと上手になりたいという意欲の向上につながった。【資料3】～【資料5】。

また、事前、事後のアンケートを【資料6】、【資料7】のように活用し、【表2】、【表3】のような結果となった。5年生のティーボールの学習では、「楽しさ」の部分で評価が上がっている。また、技能面で高まりを感じていることも分かる。2年生のシュートボールの学習では、体育の学習が「嫌い」と解答していた児童が0%になったことから、この単元の学習で運動の楽しさを味わうことがで

きたと考えられる。

(2) 技能を高めたり達成感が得られるような単元計画、1 単位時間の工夫

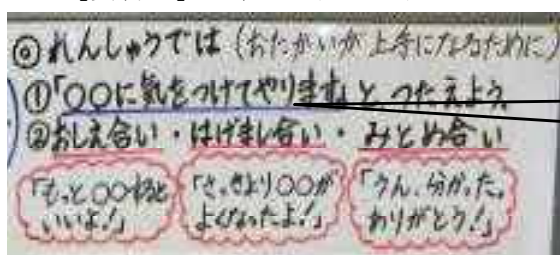
児童の運動技能が高まり、達成感を得るためには単元全体、1 単位時間の指導の流れを工夫する必要がある。次のようなことを行えば児童の運動技能の高まりや達成感が得られるのではないかと考え指導を行った。

ア めあてのもたせ方の工夫

「前よりできた」、「もう少しできそう」と感じられたとき、技能の高まりや達成感を得ることができる。そのためにも、児童がめあてをもって、それが達成できるように授業を計画する必要がある。ねらいや児童の実態によって、めあての立て方は、学級全体、個人、チーム（グループ）毎などが考えられる。

◎実践例

【資料 8】3 年 マット運動



個人毎にめあてをもたせ、達成できるように学習を計画した例。【資料 8】

イ 1 単位時間の運動量の確保

運動技能を高めるためには、運動時間の確保が必要である。体育の学習の場面分けを【表 4】のように考えている。

【表 4】体育授業場面の観察カテゴリーと定義

カテゴリー	定義
学習指導場面 (Instruction)	教師がクラス全体の子どもを対象に説明、演示、支持を与える場面
認知的学習場面 (Activity1)	学習者が認知的な学習活動を行う場面
運動学習場面 (Activity2)	学習者が体操、練習、ゲームなど運動活動を行う場面
マネジメント (Management)	上記以外の活動で、学習成果に直接つながらない場面

このうち児童が直接体育の授業に関わってくるのが運動学習場面と認知的学習場面である。一つの目安として 45 分の授業のうち、【表 5】の割合を目指して授業を行うことにした。

【表 5】体育授業場面の目標割合と時間

カテゴリー	割合	時間
学習指導場面 (Instruction)	20 %以内	9 分
認知的学習場面 (Activity1)	20 %	9 分
運動学習場面 (Activity2)	50 %以上	22 分 30 秒
マネジメント (Management)	10 %	4 分 30 秒

上記の時間はあくまでも目安であるので、単元の前半、後半、領域、指導者のねらいによって変わってくる。ただ、運動学習場面をなるべく多くし、マネジメントが減るように工夫した。

本校ではそれぞれのカテゴリーにどれ位時間がかかったかを客観的に振り返ることができるように「体育授業場面コーディングシート」を活用した。【別紙資料 3】

◎実践例

- 一人ひとりの運動時間を多くするために、マット運動において、感覚づくりの種目を6種類ローテーションにした例【資料9】

【資料9】5年生 マット運動



児童全員が常に活動している時間。待ち時間がなく主体的に活動している。

- 一人ひとりの運動学習時間を多くするため、一人一つずつ用具を用意した例【資料10】

【資料10】2年生 シュートボール



- どの児童もゲームに参加できるように、バスケットボールを3対3のゲーム形式にした例【資料11】

【資料11】6年生 バスケットボール



得点しやすくするために3対2で練習している

ローテーションで点が入ったり、ボールカットされたら交代。得点板に点数を入れたり、励ましたりしている。

得点カウント、ローテーション、攻守交代を児童が主体的に行っている

- コーディングシート結果【表6】、【表7】

【表6】6年 バスケットボール (3/9時間目)

	学習指導場面 (I)	認知学習場面 (A 1)	運動学習場面 (A 2)	マネジメント (M)
割合	22%	19%	48%	11%

【表7】1年 マット運動 (2/7時間目)

	学習指導場面 (I)	認知学習場面 (A 1)	運動学習場面 (A 2)	マネジメント (M)
割合	24%	10%	46%	20%

○考察

道具の準備・確保、場の設定を工夫をしたことで、一人ひとりの運動時間が増えた。運動する時間が増えたことで運動への親しみやめあての達成につながり、それが運動の楽しさや喜びにつながった。また、単元の最初にはマネジメントの割合が多かったが、単元が進むうちに道具の準備が早くなりマネジメントの割合が少なくなったことで、運動量の確保につなげることができた。

ウ 「友達と教え合ったり励まし合ったりできる楽しさ」が感じられる授業展開の工夫

友達と教え合ったり励まし合ったりしながら学習を進めることで、技能の高まりや達成感を得ることにつながる。教え合いや励まし合いをする際にペアやグループに分けて学習しているが、ペアやグループの作り方は、【表8】のように2通りがあると考えた。

【表8】 体育学習場面におけるペア・グループ分けの種類と良さ及び留意点

ペア・グループの種類	ペア・グループ分けの良さと留意点
等質のペア・グループ	<p>運動能力、課題（取り組む種目の難易度等）が同じ児童同士を組ませ学習を行う。課題が共有しやすくなり、お互いにめあての達成に向けたアドバイスや励ましがしやすくなる。教師もポイントを絞った指導がしやすくなる。</p> <p>能力が高い児童のグループは、自主的に取り組ませたり、発展的な技に取り組ませたりしやすい。ただし、技の危険度が増えるときは、自主性に任せすぎるのは危険である。能力が低い児童のグループには、教師の支援がより必要になる。また、運動が苦手な児童同士でもアドバイスできるようにアドバイスのポイントを明確にしておくか、アドバイスできるリーダー的な児童を入れるなどの配慮が必要だと考えられる。</p>
異質のペア・グループ	<p>運動能力、課題が違う児童同士を組ませ学習を行わせる。運動の苦手な児童も得意な児童も、観察する視点を与えることでお互いにアドバイスをすることができる。また、勝敗が決まるゲームや競争（競走）の場合、結果に偏りが出にくい。グループを作る際は、リーダー性のある児童、男女バランス、運動の得意な児童、運動の苦手な児童などバランスを考慮する必要がある。また、勝敗が左右する領域においては、結果が偏りすぎないように留意する必要がある。</p>

◎実践例

【資料12】 5年 マット運動



足、腰の位置が高くなっているかどうか周りの人が見て、演技後アドバイスをを行うなど対話的学習が行われている。【資料12】

・異質のグループでの学習

【資料13】 2年 シュートボール



ゲーム①の後、グループ毎に「シュートまでのよい動き」について、確認している。【資料13】

【資料14】



グループでの発言を全体でも確認し、児童と教師が対話しながら「シュートまでのよい動き」について確認している。対話から深い学びへ。【資料14】

【資料 15】



前の試合の点数を集計している間に、次の試合のチームの児童同士がどのように攻めるか作戦を話し合っていた。「作戦タイム」を設けなくても待ち時間があれば、児童自らが対話し作戦を考えることができる。【資料 15】

* 「待ち時間」だったが、「認知的学習場面」として変えられる可能性がある。

* 等質のペア・グループにおいては、授業研では扱わなかったが、跳び箱運動においては、実施した学年もあった。

○考察

ボール運動などゲーム性の種目については、作戦タイム、反省の時などには当然対話が生まれた。ゲーム中、練習中にもアドバイスが行われた。また、器械運動では、練習中は常にアドバイスができた。このような状況から、ペア・グループ学習の工夫は児童に運動の楽しさを感じさせる上で極めて重要であると考えられる。

エ 雰囲気がよくくなるような指導の工夫

学習の雰囲気がよいと、運動技能向上や達成感獲得につながる。雰囲気のよい学習にするために次の3点を考えた。

①教師の肯定的な声掛け

本校では教師が授業中にどのような声掛けを行ったかを確認する手段として「教師の相互作用行動の観察コーディングシート」を活用することにした（資料4）。その中では、教師の声掛けを【表9】のように分類した。

【表9】教師の相互作用行動の観察カテゴリーと定義

発 問		主体的な意見や問題解決を要求する言語的・非言語的行動 例「手の着き方はそれでいいかな」	
フ イ ー	肯 定 的	一般的	児童の技能のできばえや応答・意見に対する具体的情報を伴わない言語的・非言語的行動（賞賛） 例 「うまい」「いいよ」 拍手
		具体的	児童の技能のできばえや応答・意見に対する具体的情報を伴った言語的・非言語的行動（賞賛） 例 「腕の上げ方がとてもよくなったね」
ド バ ッ	矯 正 的	一般的	児童の技能のできばえや応答・意見に対する具体的情報を伴わない矯正・修正的な言語的・非言語的行動 例 「まだ」「もう少しだな」「どうかな？」 首をかしげる
		具体的	児童の技能のできばえや応答・意見に対する具体的情報を伴った矯正・修正的な言語的・非言語的行動 例 「まだ腕の振りが足りないね」
ク	否 定 的	一般的	児童の技能のできばえや応答・意見に対する具体的情報を伴わない否定的な言語的・非言語的行動 例 「だめだ」「何考えている」 顔をしかめる
		具体的	児童の技能のできばえや応答・意見に対する具体的情報を伴った否定的な言語的・非言語的行動（賞賛） 例 「だめ、そんな腕の上げ方だとできないと言ってただろう」
励 ま し		児童の技能達成や認知的行動を促進させるための言語的・非言語的行動 例 「がんばれ」「いけいけ」「さあ、しっかり考えよう」	

できるだけ児童を励ましたり技能が向上したりするような声掛けが増えるように教師が意識して授業を行う。(目標は1授業100回以上の声掛け)

◎実践例

【表10】教師の相互作用行動の結果 5年 ティーボール

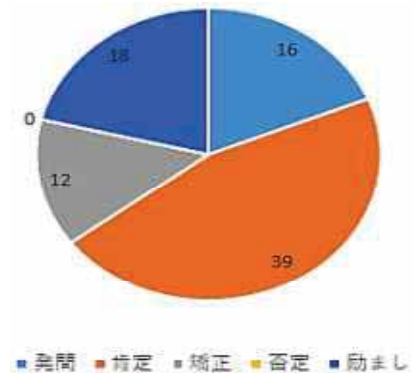
		個人	集団	合計
発問		13	11	24
肯定	一般	14	2	16
	具体	3	2	5
矯正	一般	2	0	2
	具体	10	0	10
否定	一般	0	0	0
	具体	0	0	0
励まし		35	1	36
合計		77	16	93



【図1】教師の相互作用行動の結果 5年 ティーボール

【表11】教師の相互作用行動の結果 3年 マット運動

		個人	集団	合計
発問		4	12	16
肯定	一般	17	3	20
	具体	12	7	19
矯正	一般	2	1	6
	具体	5	1	6
否定	一般	0	0	0
	具体	0	0	0
励まし		10	8	18
合計		50	32	82



【図2】教師の相互作用行動の結果 3年 マット運動

○考察

100回以上は記録されていないが、実際には聞き取れないこともあり、記録する方の難しさがあった。「上手」など肯定的な声掛けを心掛けたことで、楽しい雰囲気での授業が行われた。また、教師の矯正的な声掛けが教師と児童の対話につながったり、児童同士の対話のきっかけになったりするなど、児童の授業に対する満足感が見られるようになった。

②児童同士の言動

体育が楽しいと感じられるためには、教師の声掛けだけでなく、児童相互における肯定的な声掛けが必要である。教師は、児童相互の声掛けを促し、楽しい雰囲気での授業が進められるように配慮していくことが必要である。

例 ハイタッチ、拍手、「ナイス」、「ドンマイ」、「うまい」、「おいしい」などの声掛けするように働きかける。

◎実践例

【資料 16】



上手に後転できた児童に対し拍手している。【資料 16】

【資料 17】



跳べた児童に対し「ナイス」と合図している。【資料 17】

③場の設定

練習中に音楽をかけるなど楽しい雰囲気にする 것도有効ではないか。

○考察

サーキット等ある程度の時間運動し続けるときは、気持ちの高揚感や楽しさにつながっていた。音楽を活用するためには、音響機器が身近にある必要がある。タブレット (CD ラジカセ)、スピーカーの備品整備を進めていきたい。

オ 補助具や場の設定の工夫

児童が「できた」、「できそうだ」という技能の高まり、達成感を得るためには、補助具の活用や場の工夫をすることが有効である。そのままではできない児童も、補助具を活用することで、動作の仕方が知ることができ、正しい動きにつなげることができる。また、運動の場を工夫することで「これなら少しはできそう」、「これぐらいならできるかも」と意欲を高めることができる。児童のつまずきを予想し、どの場面でのどの補助具を用いるか、どのような場を設定するかを教師があらかじめ考えておく必要がある。

◎実践例

【資料 18】 3年マット運動 (後転)



足を着く位置

*足の位置を少し高くして傾斜をつくっている。【資料 18】

頭と手を着く位置

【資料 19】 5年マット運動



ゴム紐を用い、高く腰、足を上げることを意識させている。【資料 19】

腰、足を高く上げ、ゴム紐を越えて向こう側へ行くように練習している。【資料 20】

【資料 20】 5年マット運動



【資料 21】 6 年バスケットボール



シュートが入りやすい場所を示す。

【資料 21】

【資料 22】 6 年バスケットボール



白い枠に走り込みそこにパスを出す。

パスを受けとったら シュート。【資料 22】

◎考察

3年マット運動では、手や足の着く位置、向きが分かったことで、技能の向上につながった。また、5年マット運動では、ゴム紐を跳び越えたことですぐに自分の成果が分かり喜びにつながった。言葉だけでは理解できない児童も、補助具を用いたり、場所を工夫することで技能の向上につながり、それが達成感や喜びにつなげることができる。

V 研究の成果と課題

1 成果

(1) 系統性を踏まえた指導

- ・ 系統性を考え年間計画を立てたことにより、学年に応じた技能の目標に到達する児童が増え、児童の喜びや達成感につながった。
- ・ 学年に応じた運動の内容を考えたことにより、児童の運動への興味・関心が高まり、運動の楽しさや喜びを感じる児童が増えた。
- ・ 各領域における必要な準備運動（感覚づくり）を低学年からしっかり取り組ませていくことで基礎的・基本的な資質や能力が高まり、「できた」、「できそうだ」という喜びにつながった。

(2) 運動の技能の高まりや達成感が得られるような指導

- ・ めあてと振り返りを設けたことで、自分の成長や課題に気付き、技能の高まりを確かめられたり達成感を感じたりできた。
- ・ 場を工夫したことで運動量が増え、技能の習得につながった。その結果「できた」、「できそうだ」という楽しさや喜びを感じることもできた。
- ・ 関わりを意図的につくったことで児童同士の対話や学び合いが増え、教え合ったり作戦を考えたりする楽しさを感じることもできた。
- ・ 教師が意図的に肯定的な声掛けを行ったことで、児童にも肯定的な声掛けが増え、運動が得意でない児童も楽しんで活動できた。
- ・ 補助具を活用したことで具体的な動き方や目標が分かり、「できた」、「できそうだ」という喜びや達成感につながった。

2 課題

(1) 系統性を踏まえた指導

- ・ 系統性、種目、実施時期等が本校の実態に合っているかをさらに検討し年間計画を見直す必要がある。

(2)運動の技能の高まりや達成感が得られるような指導

- ・全校でのアンケートを実施できなかったので、年度初め頃、年度終わり頃にアンケートを実施し、「体育の授業を通して運動の楽しさや喜びが感じられたか」確かめていきたい。
- ・個人めあての設定や振り返りの仕方について研究を深めたい。
- ・技能を高めるための「肯定的具体的声掛け」が増えるように心掛けて指導していきたい。
- ・主体的・対話的な学習場面、思考・判断の場面を発達段階に応じてどのように取り入れるか研究を深めたい。

主な参考文献、研修会・公開等、指導していただいた先生

(文献)

- ・小学校学習指導要領解説体育編
- ・小学校体育まるわかりハンドブック（文部科学省）
- ・学校体育実技資料集（文部科学省）
- ・評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 小学校体育
(国立教育政策研究所教育課程研究センター)
- ・楽しい体育の授業（明治図書）
- ・体育科教育（大修館書店）
- ・体育授業を観察評価する 高橋 健夫（明治出版）

(研修会、公開等)

- ・北上体育学習会
- ・岩手体育学習会集会（岩手大学教育学部附属小学校）
- ・久慈小授業フォーラム（久慈市立久慈小学校）
- ・岩手県体育研究大会
- ・沢内小学校公開、授業実践交流会
- ・地区別授業改善研修会（西和賀町立湯田小学校）
- ・全国学校体育研究大会
- ・体育授業研究会

(指導していただいた先生)

- ・西和賀町立湯田小学校長 盛島 寛先生
- ・中部教育事務所 主任指導主事 八重樫 満先生
- ・盛岡教育事務所 指導主事 小野 甚市先生